

現代日本の塔状の住宅における建築家の空間認識と設計意図 Spatial Conception and Design Theme in Tower Shape Housing

奥山研究室 15M30317 藤村 拓史 (FUJIMURA, Hirofumi)

keywords：塔状の住宅、設計意図、空間認識
tower shape housing, design theme, spatial conception

1. 序

1-1. 研究の背景と目的

建築家による様々な都市プロジェクトが発表された 1960 年代に竣工した塔の家は、わずか 6 坪の敷地に空間を積層することで、建築家・東孝光の都心に住まう姿勢を実体化した作品である。一方近年、狭小敷地の住宅が一般化した状況において、床が積層された塔状の住宅は建築の形式のひとつとして成立しているといえ、その設計論からは塔状の住宅がもつ立体的な空間構成や床を突き抜ける体験などに着目する建築家の思考や、狭小性や高さに関連した空間の認識を読み取ることができる。このような思考の広がりや、垂直方向に展開された空間に関連した建築家の設計思想を捉える上で重要であると考えられる。そこで本研究では、塔状の住宅^{註1)}の設計論にみられる空間認識と設計意図を検討することで、住宅設計思想の一端を明らかにすることを目的とする。

2. 塔状の住宅における空間認識

資料とした設計論からは建築家が塔状の住宅の空間をどのように認識しているかを読み取ることができる。例えば、図1の分析例では、「1階から3階まで」「ダイニングルーム」「テラス」「最上階」の空間について記述されており、設計論において言及されるこのような空間は特に建築家が認識している空間であるとして、空間認識単位として抽出する。また「階高は可能な

限り抑える」のように記述される空間がどのような性格を持つかを読み取ることができ、これを空間認識単位の性格として抽出する。本章では、空間認識単位とその性格を抽出し検討することで、モデル図を作成し、設計論にみられる建築家の空間認識の内容と偏りを明らかにする(図2)。

2-1. 塔状の住宅の空間認識単位と空間認識モデル

設計論には、繰り返し記述される空間認識単位がみられる。こうした単位は建築家がより強く認識している空間であると捉えられることから、こうした認識の偏りを空間認識単位が言及された回数で捉え、空間認識モデルとして図化した。さらに全ての資料のモデル図を比較・検討し、空間認識の偏りを『上部』『中間部』『下部』『上部下部』『偏りなし』に分類した^{註2)}(図3)。ここでは認識に偏りのないものが最も多く、次いで建築上部に認識が偏るモデルが多かった。

2-2. 塔状の住宅の空間認識単位の性格

空間認識単位の性格の内容について検討した結果、光環境や風環境などの性格を示す[環境]、比喩表現を用いてイメージを投影する[イメージ]、スケールや素材などの実体的側面について描写をする[実体]、眺望や外部空間との関係を示す[外部]、そして開放感などの現象を説明する[現象]の5つから捉えられた(図4)。これらの性格の数は建築家の空間認識の強さをあらわしていると考えられることから、その数の偏りを

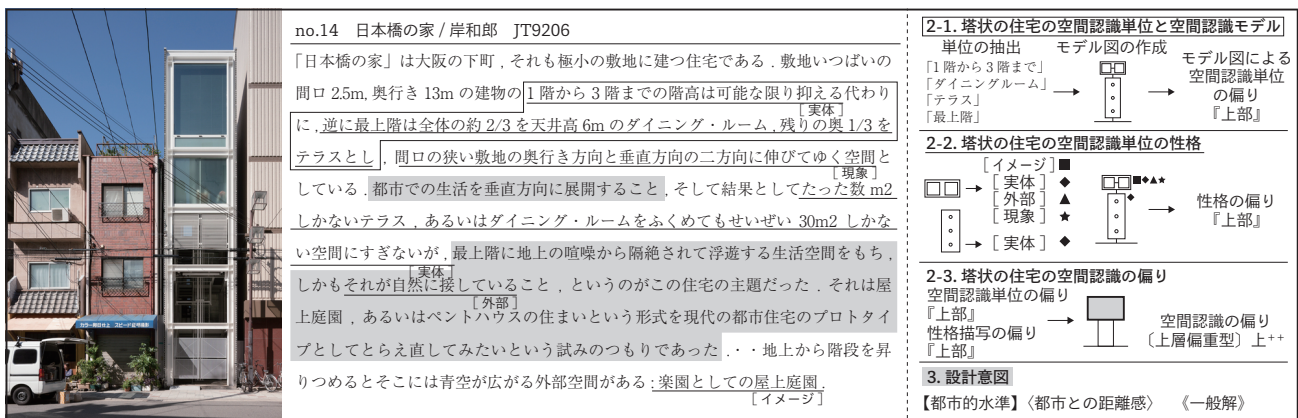


図 1. 分析例

図 8. 空間認識の偏り

これらの設計意図の中には、住宅のプロトタイプとして提案するものがみられたため、これを《一般解》とし、それ以外を《特殊解》とした。《一般解》は全資料の約 1/3 に認められ、その大半が【都市的水準】に集中することがわかった（図 9）。これより、塔状の住宅を都市住宅のプロトタイプとして捉える建築家の思考が読み取れる。

4. 塔状の住宅の空間認識と設計意図の関係と変容

2 章で捉えた空間認識の偏りを横軸に、3 章で捉えた設計意図を縦軸にとり、その組合せを図 10 に示した。設計意図の水準に着目すると、【都市的水準】に〔均等認識型〕が多くみられること、【都市+建築】では〔上層偏重型〕が半数近くを占めること、【建築的水準】には〔上下偏重型〕が比較的多くみられる傾向にあることがわかった。まず、【都市的水準】の〔均等認識型〕では、〈都市居住の姿勢〉を設計意図とするものが大半を占めることから、都市の狭小な敷地における住宅設計の手法や建築の構成について説明的に記述し、提案を行う建築家の姿勢が示されていると推測することができる。また【都市的水準】では〔下層偏重型〕の数が比較的多く、塔状の住宅の地上階部分を都市との接続部分として捉え、都市住宅のプロトタイプとして提案する建築家の思考があらわれていると考えられる。次に【都市+建築】の〔上層偏重型〕では、〈外部空間を取り込む〉が多く、ここから塔状の住宅の上部空間を都市空間と対応させて設計する傾向があることがわかる。【建築的水準】の〔上下偏重型〕では〈垂直空間の創出〉と〈広がり・連続性の創出〉が多く、これは地上階と最上階を塔状の住宅の始点と終点として捉え、上下を繋ぐようにして垂直方向に広がりや連続性を持った建築空間を実現しようとする思考があらわれているものと考えられる。また、【建築的水準】には、〔均等認識型〕と〈広がり感・連続性の創出〉の組合せも多くみられ、ここには積層された各空間同士を関係づけることで、平面の狭小性を感じさせない内部空間をつくり出そうとする建築家の思考があ

らわれていると考えられる。

次に塔状の住宅における空間認識と設計意図を通時的に検討したものが図 11 である。まず、本研究で扱う塔状の住宅の資料数が 2000 年代まで大きく増加しており、2010 年代にかけては増加がみられないことがわかる。これは 1990 年代後半から 2000 年代前半にかけて「狭小住宅」という言葉が生まれ、建築家によって多くの狭小な敷地に建つ住宅が設計されたことに関連していると考えられる。また 2010 年代以降は塔状の住宅が住宅の形式として一般化したことが考えられる。次に 90 年代に着目すると、他の年代では《特殊解》の数が多いのに対して、ここでは資料の半数以上が《一般解》であることから、この時代が多くの建築家のプロトタイプとしての提案を通して、塔状の住宅が提案された黎明期であったことがわかる。さらにその提案の多くが〔上層偏重型〕であることから、塔状の住宅の特徴的な高さを伴った上部空間を肯定的に捉える建築家の思考が読み取れる。2000 年代に入ると、《一般解》が、〔上層偏重型〕から〔均等認識型〕に移移することがわかった。ここでは空間が積層された単純な構成の塔状の住宅から脱却し、新しい構成を持った塔状の住宅を提案しようとする建築家の姿勢があらわれていると推測できる。さらに、2000 年代の設計意図においては【建築的水準】が多い傾向にあることがわかる。これは社会的に小さな住宅が多くつくられたことによって、建築家の関心が狭小空間における建築の内部構成にあったことを示していると考えられる。しかしながら、2010 年代に入ると【都市+建築】が増加しており、東日本大震災など社会的な問題に直面したことによって、建築家の意識が再び都市に向かい、建築空間と都市空間の対応から塔状の住宅を提案しようとする流れにあることがわかった。

5. 結

以上、塔状の住宅の設計論から建築家の空間認識と設計意図、そしてその関係について検討した。その結果、塔状の住宅

	《一般解》27	《特殊解》74
【都市的水準】32	〈都市居住の姿勢 (Wi)〉10— 町に住むことはすなわち、交わりの象徴である町と個人の象徴である「住まい」との融合であると考えられる。この建物はそんな町に建つ住まいの一事例である (JT9705 蛭池の家 / 坂本昭)	〈都市居住の姿勢 (Wi)〉9— 住まい手の都心に住むという強い意志さえあれば、たとえ商業地域の狭い土地でも、明るく開放的なおかつプライバシーの守られた住空間の獲得が可能であることを実感した。 (JT0211 OGINO HOUSE / 細谷功)
	〈都市と呼応した空間 (Re)〉3— 求められたのは、若い家族にふさわしい、これからの「都市の住まい」をつくり出すことだった。…それは、まるで街を歩く風景が絶えず連続し、建物の間から日射しが降り注ぐ都市の体験となつた。 (JT1205 中嶋の家 / 榊原節子)	〈都市と呼応した空間 (Re)〉13— こうして環境に呼応して立ち上がる建築が、同時にまちをゆくりと動かし始め、この土地固有の繋がりと豊かな開放感をつくり出すことを期待している。 (JT1811 stir / 御手洗龍)
【都市+建築】35	〈垂直空間の創出 (Ve)〉5— 雑然とした環境に対しては、特異な形態・建築的装飾は可能な限り排除し、特殊解でなくシンプルな一般解での解決を考えた…対立する 2 枚の壁 (曲と直) がつくり出すスリットの奥に、非物質的な象徴的宇宙をイメージすること意図した (JT9504 漂う家 / 谷川豊)	〈外部空間を取り込む (Ex)〉17— 敷地という地面で制約された境界を超えて、周辺環境が住宅内部に参加することで、より大きな気候を設計することにした。 (JT0908 桜川の家 / SUPPOSE DESIGN OFFICE)
	〈垂直空間の創出 (Ve)〉13— 地上の玄関からうねりながら連続して上昇し、プランターを形成してひとつの終結となる。が、そこに溜められた上昇エネルギーが、さらに天窓を通し空へと連続していく。天地人の三位一体の純粋空間が誕生する。 (JT8710 丸山邸 / 海野龍三)	〈広がり・連続性の創出 (Co)〉11— 単純な輪郭のコンクリートの壁でできた囲いの中に、小さな部屋の単位をつなぎあわせながら、どうしたら広々とした感じを生み出せるかということがこの住宅の設計の主題であった。 (JT9112 日暮里の町家 1990 / 富永謙)
【建築的水準】34		〈多様な場の創出 (Va)〉5— つまりその場その場の快適性や豊かさを追求することを徹底して、その結果それぞれの場所にキャラクター性を強く印象付けたのである。 (JT1007 南加瀬の住宅 / 納谷孝 + 納谷新)

図 9. 設計意図の内容のまとめ

の断面的な部位に対応した設計意図がみられることを明らかにした。また通時的にみると塔状の住宅が普及し始めた 90 年代には建築上部に着目した住宅形式をプロトタイプとして提案する傾向があり、2000 年代には空間的特徴や構築手法を狭小住宅の手法として提案するようになるという変化が見られた。そして近年では都市と対応した上部空間を持った塔状の住宅を構想する傾向にあることを明らかにした。

註) 1) 本研究では、建築専門誌の中でもっとも代表的であると思われ、長期にわたって日本国内で発行されている「新建築」「新建築 住宅特集」に掲載された新築住宅作品のうち、建築家による設計意図が読み取れるものに塔状の住宅として日本住宅史において重要と考えられる「塔の家（建築 66 年号）」と「カラス城（都市住宅 75 年号別冊夏）」を加えた全 101 作品を資料対象とする。本研究では狭小住宅、塔状戸建て住宅に関する既往研究を元に、一般に狭小住宅と認められる 15 坪以下の建築面積を持ち、かつ地上 4 層以上のものと塔状住宅を定義した。
2) ここでは 1 階と最上階の間の中層部にのみ単位が偏るものを「中間部」、最上階と中層部両方に偏りを持つものを「上部」、同様に地上階と中層部両方に偏りを持つものを「下部」としている。
3) 複数箇所に性格がみられる場合は、性格の個数に 2 つ以上の差があった場合に偏りがあるものとして、単位の偏りと同じように性格の偏りを導いている。

既往研究) 菊地晃平 内田文雄「都市型狭小住宅における内部空間の断面的手法に関する研究」(2012)
西慶三 安田幸一 他「現代日本の塔状戸建て住宅における外形変化と階段の形式・配置」(2015)
我謝和征 鈴木広隆 他「狭小住宅における室内空間の広がりや吹抜けとの関係についての研究」



図 10. 空間認識と設計意図の組合せ

